

道真詩における「月」の見立て

The Expression of Metaphor of the Moon in Poetry of Michizane

潘 怡良

PAN Yiliang

はじめに

日本では、万葉の時代から、中国では、「詩経」の時代から、月は詩に詠じられてきた。明月と朧月、満月と残月など、月のさまざまな姿が、歴代の詩人に多様なインスピレーションを与え、月を詠ずる名篇が数えきれないほど多く作られてきた。

月も「道真が最も好んで詩に詠じた風物の一つ」¹である。道真の詩においては、何らかの形で「月」のイメージを含む作が全部で九十二首あり、道真の現存作の20%弱を占めている。

道真の月は、従来の、中国と日本の月の表現を意識しつつ、島田忠臣の表現を継承して、八月十五日の月を詠ずる伝統を開き、また伝統的な月を翫でる日とは異なる日の月を詠じている。道真は、「見立ての技巧に最も彫心鏤骨した詩人であった」²と評価されているが、月の表現にもたくさんの見立ての技法が見られる。

道真は中国の従来の月を詠ずる作、特に李白と白居易の作の影響を深く受けており、「鏡」、「弓」、「弦」、「雪」、また「氷」、「鉤」、「環」、「眉」、「玉」などの伝統的な喩詞を幅広く使用している。「鉤」、「弓」は、月の被喩詞としても用いられている。

このように、道真は従来の中国・日本における月の表現の伝統を継承し発展させているが、道真の独創もある。彼は、月を喩詞として、自分のことを寓し、また天皇を寓する作品を詠じている。これらの作は、道真の詩臣としての本質と深く関わって生みだされたものである。

拙文では「月」に関する見立て表現について、道真がどのように李白及び白居易の詩をはじめとして、中国詩の表現を受容し、また新たな表現技法を作り出したのかを考察したい。

第一章 道真にとっての月

1-1 道真詩における「月」の比喩表現

1-1-1 道真の用例

¹ 藤原克己著『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、2001年）298頁。

² 藤原克己著・同上・270頁。

道真の詩作においては、月を被喩詞として何かに見立てる表現を含む作が十八首ある。その内、喩詞が「鏡」のものが六首、「弓」または「弦」のものが四首、「雪」または「氷」のものが三首、「環」が三首、「鉤」が三首、「眉」が二首、「ぬの」が二首、喩詞が「玉」（「珠」）、「魚」、「筆」が各一首（一作の中、複数の喩詞がある作がある）である。具体的な用例は以下の通り：

喩詞	用例
鏡	01. 圓似江波初鑄鏡 圓きことは 江波に初めて鑄る鏡に似たり 映如沙岸半披金 映りて 沙の岸に半披く金の如し³ (116「水中月」) 02. 沙庭感誤松江宿 沙の庭に感じ誤つ 松江に宿るかど 月砌驚疑鏡水遊 月の砌に驚き疑う 鏡水に遊ぶかと (349「重陽後朝、同賦秋雁檣聲來、應製」) 03. 萬里氷紉庭不疊 萬里の氷なす 紉 庭に疊まず 千家玉鏡匣無收 千家の玉なす鏡 匣に收むることなし (354「雨晴對月、韻用流字、應製」) 04. 破殘寒月鏡 破れて残る 寒月の鏡 來迫曉霜鋒 來りて迫む 曉霜の鋒 (373「賦葉落庭柯空」) 05. 月光似鏡無明罪 月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし 風氣如刀不破愁 風の氣は刀の如くなれども 愁えを破らず (485「秋夜」) 06. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度りて只今の秋 如鏡如環本是鉤 鏡の如く環の如くにして 本これ鉤なり (510「問秋月」)
弓（弦）	07. 畏月是孤弦 月を畏る これ孤弦ならんかと 渡江非一葦 江を渡る 一葦のみにあらじ (008「九日侍宴、同賦鴻雁來賓、各探一字、得葦、應製」) 08. 秋來六日未全秋 秋來りて六日 全き秋ならず 白露如珠月似鉤 白露は珠の如く 月は鉤に似たり (037「七月六日文會」) 09. 仙娥弦未滿 仙娥 弦 滿たざるに 禁漏箭頻加 禁漏 箭 頻に加う (107「夏夜對渤海客、同賦月華臨靜夜詩」) 10. 插雲驚度雁 雲を插みては 度る雁を驚かす 投水誤遊魚 水に投りては 遊げる魚を誤つ (193「新月二十韻」)

³ 本文及び詩題に付す作品番号は川口久雄『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、1966年）に依る。訓読は川口に拠りつつ、筆者の意により適宜改める。書き下し文の仮名は現代仮名遣いを用いた。

雪 (氷)	11. 月耀如晴雪 月の耀くは晴れたる雪の如し 梅花似照星 梅花は照れる星に似たり (001「月夜見梅花」) 12. 消残砌雪心猶誤 消え残る砌の雪に心はなおし誤つ 挑盡窓燈眼更嫌 挑げ盡す窓の燈に眼は更に嫌う (036「山陰亭、冬夜待月」) 13. 山疑小雪微微積 山疑うらくは 小しき雪の微微として積もるか 水誤新氷漸漸生 水誤つらくは 新しき氷の漸漸に生ずるか (275「冬夜對月憶友人」)
環	14. 遠雞一報頭廻望 遠雞一たび報じて 頭を廻して望めば 插著寒雲半缺環 寒雲に插著す 半缺くる環 (313「曉月」) 15. 何處粧樓擲玉環 何れの處の粧樓か 玉環を擲つ 一明一暗曉雲間 一たび明るく一たび暗し 曉の雲の間 (355「曉月、應製」) 16. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度りて只今の秋 如鏡如環本是鈎 鏡の如く環の如くにして 本これ鈎なり (510「問秋月」)
鈎	17. 仙盞追來花錦亂 仙盞 追ひ來りて 花錦亂る 御簾卷却月鈎新 御簾 卷き却けて月鈎新なり (324「三月三日、侍於雅院。賜侍臣曲水之飲、應製」) 18. 綠酒猶催醒後盞 綠酒猶お催す 醒めたる後の盞 珠簾未下曉來鈎 珠簾未だ下ろすまじ 曉より來の鈎 (354「雨晴對月、韻用流字、應製」) 19. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度りて只今の秋 如鏡如環本是鈎 鏡の如く環の如くにして 本これ鈎なり (510「問秋月」)
眉	20. 風腦光相似 風腦 光相似たり 蛾眉細不如 蛾眉 細くして如かず (193「新月二十韻」) 21. 乘醉和音風口緩 酔いに乗ずる和音 風の口緩ぶ 銷憂晚景月眉開 憂えを銷す晚景 月の眉開く (342「三月三日、同賦花時天似醉、應製」)
ぬの 「練」ま たは「し らきぬ」	22. 珠汗風前隨路落 珠なす汗は 風の前に路の隨に落ちたり 練光月下趁家廻 練なす光は 月の下に家を趁いて廻る (338「和田大夫感喜敕賜白馬、上呈諸侍中之詩」) 23. 萬里氷統庭不疊 萬里の氷なす統 庭に疊まず 千家玉鏡匣無收 千家の玉なす鏡 匣に收むることなし (354「雨晴對月、韻用流字、應製」)

玉（珠）	24. 海伯應慵投老蚌 かいぱく お はまぐり な ものう 海伯は老いし蚌を投ぐるに慵かるべし 山神欲惜放寒蟾 さんじん こ おし ひき おし 山神は寒いたる蟾を放すを惜まんと欲す (036「山陰亭、冬夜待月」)
魚	25. 風腦光相似 ふうのう ひかり あいに 風腦 光相似たり 蛾眉細不如 が び 蛾眉 細くして如かず (193「新月二十韻」)
筆（金毫）	26. 此時天縱金毫詠 てんはしきまま 此の時天 縦 にす きんごう よう 金毫の詠 何處人遑秉燭遊 いとも 何れの處にか人遑ありて しよく と 燭を秉りて遊べる (354「雨晴對月、韻用流字、應製」)

月が喩詞の例は以下の通り：

被喩詞	用例
鉤	27. 鈎留枝掛月 すみかざとどま 鈎 留りて 枝 月を掛く 粉落葉凝霜 しろきもの 粉 落ちて 葉 霜を凝す (006「賦得躬桑、一首」)
弓	28. 細月空驚質 むな まと 細き月は空しく質を驚す 清風自發聲 清しき風は自らに聲を發す (411「弓」)
天子	29. 雲生不放寒蟾素 しろ 雲生まるれば 寒蟾の素きことを放たず 桂死何勝毒蠹緇 か 桂死れんとして 何ぞ毒蠹の緇きことに勝えん (119「余近敘詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見訓。更依本韻、重答以謝」) 30. 當時誰道四方在 い 當時誰か道いけん 四方に在らんと 苦惜孤輪獨望西 ねんごう 苦に惜しむなり 孤輪の獨り西を望むことを (361「霜夜對月」) 31. 月光似鏡無明罪 つみ あきら 月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし 風氣如刀不破愁 やぶ 風の氣は刀の如くなれども 愁えを破らず (485「秋夜」) 32. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度り 只今の秋 如鏡如環本是鈎 つりばり 鏡の如く環の如くにして 本これ鈎なり 爲問未曾告終始 かろがゆえ 爲に問う 曾て終始を告げざりしことを 被浮雲掩向西流 しゅうし 浮べる雲に掩はれて西に向いて流る (510「問秋月」)

自分	33. 高齋待月月何淹 高齋に月を待てば 月何ぞ淹^{ひさ}しき 不畏風霜幾撥簾 畏れず 風霜の幾たびか簾を撥^{はら}うことを (036「山陰亭、冬夜待月」) 34. 穿雲明月應能照 雲を穿ちて明月 能く照らすならん 何更人前事事談 何ぞ更に人の前にして 事事を談^{かた}らん (436「九日後朝、同賦秋深、應製」) 35. 秋珪一隻度天存 秋珪一隻 天を度りて存す 下照千家不定門 下は千家を照らして 門を定めず (441「八月十五夜、同賦秋月如珪、應製」)
----	---

1-1-2 漢詩における月の見立て表現の前例

道真の前に、日本でも、「月」を何かに比喩する作は多い。先例を少し挙げよう。

「懷風藻」⁴ には、文武天皇（六八三―七〇七）の「月を詠ず」を収めている。

月舟移霧渚 月舟 霧渚に移り
 楓檝泛霞濱 楓檝 霞濱に泛かぶ
 臺上澄流耀 臺上 流耀澄み
 酒中沉去輪 酒中 去輪沈む
 水下斜陰碎 水下りて斜陰碎け
 樹落秋光新 樹落ちて秋光新たなり
 獨以星間鏡 獨り星間の鏡を以て
 還浮雲漢津 還た雲漢の津に浮かぶ
 (「詠月」)

これがおそらく、日本で初めての月を主題とする漢詩だろう。月に特に深く意味を持たせているわけではなく、単純に月を鑑賞の対象として、月を翫でる作である。月を霞の中を走る「舟」、天の河に浮かぶ、星のなかの鏡などに見立てている。

文武天皇以降、月を被喩詞とする例としては、「雲衣 兩たび夕を觀、月鏡 一たび秋に逢ふ（雲衣兩觀夕、月鏡一逢秋）」（藤原史「七夕」）、「雲 飛んで 玉柯に低れ、月 上って 金波は動かす（雲飛低玉柯、月上動金波）」（葛井広成「月夜坐河濱」）、嵯峨天皇の「天邊 曉月 看ること鏡の如く、

⁴ 『懷風藻』・『文華秀麗集』・『凌雲集』の本文は『日本文学大系・第二十四卷』（国民図書株式会社、1927年）に依る。以下同じ。

戸外 朝山 望むこと屏に似たり（天邊曉月看如鏡、戸外朝山望似屏）」（「江亭曉興」）と「莓苔踏破 年を経る髪、楊柳未だ懸けず 月を伸ぶる眉（莓苔踏破経年髪、楊柳未懸伸月眉）」（「春日嵯峨山院、探得遅字」）、女詩人の有智子内親王の「珠を懸けて 露葉浄く、扇に臨みて 霜華清し（懸珠露葉浄、臨扇霜華清）」（「奉和關山月」）などの句があり、「鏡」、「金波」、「眉」、「珠」、「霜」などさまざまな喩詞を用いて、月・月の光を比喩している。あるいは「月は泛ぶ 眉間の魄、雲は開く 髻上の暉（月泛眉間魄、雲開髻上暉）」（荊助仁「詠美人」）のように、月を「眉」の喩詞とする作なども見える。

そして終に平安朝漢詩を開花させた島田忠臣と道真に至って、月の見立て表現は格段にその芸術的レベルを高める。

忠臣はこのように詠じた。

半破銀鍋子 半破 銀の鍋子^{かし}
排空踵日車 空を排^{おし}きて 日車を踵^おふ
當天猶熱苦 當天 猶お 熱苦たるも
仲夏却霜華 仲夏^{かえ} 却りて霜華たり
澆石多零玉 石に澆^{そそ}ぎて 多く玉を零^おとし
通林碎着花 林を通りて 碎けて花に着く
窓疑懸瀑布 窓は瀑布を懸くるかと疑い
庭訝踏晴沙 庭は晴沙を踏むかと訝る
.....

（「夏夜對渤海客、同賦月華臨淨夜詩」⁵）

この詩は沈約の「月華 淨夜に臨む、夜靜 氣埃を減す（月華臨淨夜、夜靜減氣埃）」（「雜詠五首」）から詩題を取っている。道真も同時に同じ題名の作を詠じている。この詩は満ちる前の月を半破の銀の鍋に見立て、「霜」、「零玉」、「着花」、「瀑布」、「晴沙」と複数の喩詞を用いて、実にきらびやかで変化に富む、月の光を描出している。

中国では魏晋時代から、これらの語は、よく月の喩詞として用いられているが、日本の詩人はこれを巧みに摂取している。月は、道真以前では、「閨怨」の作や、故郷と家族を懐かしむ作にもしばしば見えた。しかし、忠臣と道真の前代の詩人にとって、月は、ほとんど、ただ静かな、審美の対象としての風物でしかない。月にさまざまな豊かな姿を与えた詩人はやはり道真である。

⁵ 島田忠臣詩の本文は、中村璋八・島田伸一郎校註『田氏家集全釋』（汲古書院、1993）による。

1-2 風月と八月十五日の月

月は道真が最も好んだ風物の一つである。道真にとっての月の重要性を考察するために、道真詩における月を詠じる詩の特徴を検討しておきたい。

道真は中国の古典の影響を深く受け、詩作においては中国の伝統的な美意識をよく受け入れている。「風月」を詠ずる作はその典型である。

中国で、「風月」の語は、梁・劉勰『文心彫龍』の卷二「明詩」の、建安の詩について述べる箇所に、「並びに風月を憐み、池苑に狎れ、^{たわむ}恩榮を述べ、^{らいらく}酣宴を敘し、慷慨以て氣に任じ、磊落以て才を使う」⁶と見えるのが始めである。以後、文人たちは、この「風月」という表現によって、自然の風物、四季折々の美しい景物、自然の美しさを愛でる喜び、楽しい気分などを形容するようになる。「風月」は、日本では、道真以前、『懷風藻』に、「一面金蘭の席、三秋風月の時」(調古麻呂「初秋於長王宅宴新羅客」)、「勝地 山園の宅、秋天風月の時」(百濟和麻呂「秋日於長王宅宴新羅客」)など、数句が見える。

「風月」は道真の詩作に至って多数登場するようになる。「風月ただ天の久遠^{きゆうえん}を期するのみ(風月只期天久遠)」(092「山家晩秋」)、「明月春風期を失はず(明月春風不失期)」(178「園池晩眺」)、「清風朗月蘆簾^{せいふうろうがつうれん}に入る(清風朗月入蘆簾)」(192「早秋夜詠」)、「花前月下海邊の春(花前月下海邊春)」(225「書懷贈故人」)、「ただ風月を遺^{のこ}して金^{のこ}を遺さず(只遺風月不遺金)」(469「奉感見獻家集之御製、不改韻、兼敘鄙情」)など、「風月」あるいは「風月」と同類の表現を用いた作は、道真の詩では24首もある。道真は中国の詩の「風月」を意識しつつ、「月」が好きであるゆえに、「風月」を、快い気分をもたらす、美しい景色の象徴、好ましい雰囲気を持示するシンボルだと理解している。そして道真の詩において、美しい「風月」の表現は、その特徴をさらに明確にしつつ⁷、さまざまな表現を生み出していく。風が簾を振って上げる時に見える明月、海辺の春の月、月下での放吟高歌……道真は、その表現を従来よりも格段に豊かにした。

道真が特に月を好むのは、家風の影響でもある。道真の前代の詩人では、月を素材とする作は、時間的には七夕の月を繞る詩作が最も多い。道真は、七夕以外に、家風の伝統を継承しているが、また唐詩の仲秋の名月を翫でる風俗を受容して、日本で八月十五日の月を詠ずる嚆矢となった。

道真は、298「八月十五日夜、舊を思いて感有り」の首聯に、「菅家の故事世の人知る、月を翫^めでて今は忌月^{きげつ}の期たり(菅家故事世人知、翫月今爲忌月期)」と詠じている。川口氏は「菅原家では祖父清公以来、八月十五夜には、公宴に陪することがなければ、月亭に菅家廊下の門弟を会して翫月の詩

⁶ 一海知義・興善宏訳『陶淵明・文心彫龍』(『世界古典文学全集・第25巻』、筑摩書房、1968) 235頁。

⁷ 中国では、後、「風月」は、風流な男女関係をも意味するようになるが、道真の「風月」は、一貫して、その意味を含まない。

宴を催すのがしきたりであった。』⁸ という。また、126「諸の才子と^{あつま}りて、九月三十日、白菊の^{くさむら}叢の^{ほとり}邊に飲を命ず」の自序には、「仲秋月を^{もてあそ}翫ぶの遊び、家忌を避けて以て長く廢せり。」と記され、菅原家の翫月の伝統が明記されている。波戸岡氏は、「おそらく祖父清公以来のことと思われる。清公自身には中秋観月の詩はないが、第十六次遣唐判官清公が、中唐長安の文人間における翫月のようすを見聞する機会があったであろうことは想像に難くない」⁹と論じている。

島田忠臣も「八月十五夜」の作を三首唱っている。おそらく忠臣も菅家廊下¹⁰の影響を受けているだろう。道真の詩作では、題名に、「八月十五」という言葉が見えるものが八首ある。うち、009「八月十五夜、嚴閣尚書、後漢書を授け畢んぬ。各史を詠じて、黄憲を得たり」、012「八月十五夜、月亭に雨に遇いて月を待つ」、030「戊子之歳、八月十五日夜、月臺に陪り、各一字を分つ」、039「八月十五の夕に、月を待つ。席上にして各一字を分つ」、064「八月十五夜、月の前に^{むかし}舊を話す、各一字を分つ」は、菅家の仲秋翫月家宴時の作である。152「仁和元年八月十五日、神泉苑に行幸したまう。侍臣に詔ありて。命じて一篇^{たてまつ}を獻らしめたまう。」及び441「八月十五夜、同じく[秋月毛珪の如し]ということ^{むかし}を賦す、應製」は道真が仲秋の時、侍宴の作である。もう一首、298「八月十五日夜、^{むかし}舊を思いて感有り」は、讃岐に在って、父親を想い、過去の家宴を思う作である。

この八月十五夜の一輪の明月に向かって、道真は、各時期に、その時の思いを詠じ、彼の人生の歩みを描いた。少年時代には、自分の才能を信じて、その才能を試したい雄心を述べ（009「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黄憲」、030「戊子之歳、八月十五日夜、陪月臺、各分一字」、天皇の拔擢を待つ不安と矜持を詠い（012「八月十五夜、月亭遇雨待月」、039「八月十五夕、待月。席上各分一字」、天皇の側で終に詩臣となった時には、天皇への感謝と自分の喜びを詠い（152「仁和元年八月十五日、行幸神泉苑。有詔侍臣。命獻一篇」、讃岐に左遷されている時には、その悲しみを詠い（298「八月十五日夜、思舊有感」、天皇に信用され、右大臣に昇った時には、人生の最盛期の喜びを詠い（441「八月十五夜、同賦秋月如毛珪、應製」）……と、道真においては、八月十五日の明月と自分の人生が強く結びつき、人生の悩みと喜び、期待と失望、さまざまな思いを月を詠ずる詩によって表現している。

1-3 日常の月

道真の月への愛好は極めて深い。彼は、白詩の日常性を意識しつつ、従来の七夕の月と「閨怨」の

⁸ 川口久雄校註『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、1966年）344頁

⁹ 波戸岡旭著『宮廷詩人菅原道真―「菅家文草」「菅家後集」の世界』（笠間書院、2005）187-188頁。

¹⁰ 菅家廊下は「菅原氏の家塾の名称である……方一丈の書齋の脇に付いた廊下で門人達に講学したので菅家廊下といった。私塾としては、廊下を指導の場所としながら、ここから輩出した秀才や進士は約百名に達した。ただ廊下といって私塾の通り名となっていた。学者は、ここを龍門（登竜門）と名付けた。」（神社と神道研究会編『菅原道真事典』[勉誠出版、2004]60頁。）

月、それに八月十五日の月を詠じた上に、日常の月もよく詠じている。例えば、241「正月十日、諸生と共に詩を吟ず」、284「正月十六日、宮妓の踏歌を憶う」、342「三月三日、同じく『花の時は天も酔えるに似たり』を賦す」、349「重陽の後朝、同じく『秋雁櫓聲來る』を賦す、應製」、436「九日、後朝に、同じく『秋深し』を賦す、應製」、443「九日の後朝、朱雀院に侍りて、同じく『閑居秋水を楽しむ』を賦す、太上天皇の製に應えまつる」、451「殘菊に對いて寒月を待つ」、485「秋夜」などは、日常の様々な形の月を描写している。

この日常の月を描くにあたって、道真は、特に白詩の詠月詩を深く意識している。例えば、

秋來六日未全秋 ^{あききた むいか まだ} 秋來りて六日 全き秋ならず
 白露如珠月似鉤 ^{はくろ たま かぎ} 白露は珠の如く 月は鉤に似たり
 一感流年心最苦 ^{りゅうねん} 一たび流年に感じては 心 最も苦しむ
 不因詩酒不消愁 ^{よ け} 詩酒に因らずんば愁えを消さざらまし
 (037「七月六日文會」)

この詩は道真が貞観十二年（八七〇）、二六歳、文章得業生方略生に及第した時の作である。七月から六日目、初秋の夜、露が珠のように可憐で、新月が鉤のように空に掛かっている。また一年が過ぎ去ったかと思うと、胸が苦しい。詩と酒に頼らなければ、この切なさを消すことはできないだろう。

この詩において、月は、自らの人生への感慨を引き起こすものになっている。道真の詩において、月は単なる賞玩の域を越えて、このようにも深い味わいを持つものになったのである。

道真のこの詩を見ると、ただちに白居易の次の詩（江州での作）が思い浮かぶ。

一道殘陽鋪水中 ^{さんよう} 一道の殘陽水中に鋪き
 半江瑟瑟半江紅 ^{はんこうしつしつ はんこうくれなひ} 半江瑟瑟 半江 紅 なり
 可憐九月初三夜 憐むべし九月初三の夜
 露似真珠月似弓 露は真珠に似て月は弓に似たり
 (1291「暮江吟」¹¹⁾)

同じく七言絶句であり、道真の首聯と白居易の尾聯は、構造・表現がよく似ている。詩を詠ずる日を述べ、また露が珠のようだといい、月を鉤あるいは弓に見立てている。

道真の詩の結句について、波戸岡氏は「……主旨は、言い換えれば、今宵の宴を大いに楽しもうと

¹¹ 白詩本文は朱金城箋校・『白居易集箋校』（上海古籍出版社、1988年）に依る。詩題に付す作品番号は花房英樹が定めた白詩の作品番号である。以下同じ。

いうものではあるが、詩人道真の心情は、及第に欣喜することを詠じるよりも、及第の喜びを噛みしめつつも、過ぎ行く時を惜しみ、道に精励することを忘れぬ沈着なものである。¹²といわれる。白居易にも二十九歳で、進士に及第した時の作0703「花下自ら酒を勧む」¹³がある。波戸岡氏は、道真と白居易を比較してこういう。「栄光の中で、(白居易は)このように沈着に自己を照射して見せているのである……道真の多くの作品において、白詩からの発想、用語などの影響が顕著であることはいうまでもないことでもあるが、このような詩人の内面的、本質的な所でのかわりあい、およびその影響が、道真の場合、ことさら顕著であると言えるのである。」¹⁴

月は中国の詩人にとって、一種の哲学的な意味をも持って、永遠に存在するものである。「月を媒介として、古人と今人は時間の懸隔を乗り越え、一つに結びつけられているといえる」¹⁵。

道真の「七月六日文會」は、新月の夜、曾て白居易が貶地江州で見たのに酷似する情景を見、同時に白居易が及第した時の感懷を深く理解して、両者が融合した所に生まれたものである。道真は、白居易の体験と感情を、自分自身の体験と感情として編成することによって、月をこのようにも人生に関わる深い味わいを持つものとしたのである。

第二章 道真独特の月の見立て

2-1 明月と詩人の魂

月は詩人にとって、いわゆる「風月」、即ち風雅の情趣を提示するシンボルの一つであるだけでなく、また古今を通しての永遠の存在として哲学的な意味を持つだけでなく、時には詩人の友達にもなる。

李白の名作「月下獨酌」¹⁶には、

花間一壺酒 花間 一壺の酒
獨酌無相親 獨り酌みて相親しむもの無し
舉杯邀明月 杯を舉げて明月を邀ぶ
對影成三人 影に対して三人と成る
月既不解飲 月 既に飲むを解せず

¹² 波戸岡旭著・同上9・14頁。

¹³ 「酒醺酌み來たつて 須らく滿滿たるべし、花枝看れば即ち落つること紛紛たり。言う莫かれ 三十是れ年少しと、百歳 三分して已に一分」。貞元十七年の作。前年貞元十六年、白居易は進士科に及第している。

¹⁴ 波戸岡旭著・同上9・15頁。

¹⁵ 興膳宏「月明の中の李白」、『中国文学報』第四十四冊（中国文学会、1992年4月）76頁。

¹⁶ 李白詩本文は彭定求等編・『全唐詩』（中華書局、1960年）に依る。以下同じ。

影徒隨我身 影 徒らに我が身に隨う
 暫伴月將影 暫く月と影とを伴い
 行樂須及春 行樂 須く春に及ぶべし
 我歌月裴回 我歌えば 月 裴回し
 我舞影零亂 我舞えば 影 零亂す
 醒時同交歡 醒むる時 同に交歡し
 醉後各分散 酔うて後 各おの分散す
 永結無情遊 永く無情の遊を結び
 相期邈雲漢 相い期す邈かなる雲漢に

と詠ずる。「花前月下」の風流な雰囲気の中で一杯飲みたいのだが、友達がいらないから、月を誘って、自分の影と三人で飲もうという。残念ながら、月は酒に弱い、影も無口だ。しかし、とにかく飲もう。私が歌えば、月もこれに伴ってくれる。私が踊れば、影も一緒に動いてくれる。酔っていない時は三人で互いに楽しんでいるが、酔ってしまえば三人はばらばらになる。永遠に世俗には無い友情を結び、遠い所でまた会う約束をしよう。

白居易は、0980「山中にて月に問う」にこう詠じている：

爲問長安月 爲に問う長安の月
 誰教不相離 誰か相い離れざらしむる
 昔隨飛蓋處 昔は蓋を飛ばす處に隨い
 今照入山時 今は山に入る時を照らす
 借助秋懷曠 助けを借りて秋懷曠しく
 留連夜臥遲 留連して夜臥遅し
 如歸舊鄉國 舊郷國に歸るが如く
 似對好親知 好親知に對するに似たり
 松下行爲伴 松下行くゆく伴を爲し
 谿頭坐有期 谿頭坐して期あり
 千巖將萬壑 千巖と萬壑と
 無處不相隨 處として相隨わざるはなし

長安で見慣れた月に聞きたいことがある、誰がお前を俺の側から離れさせないのだろう。昔は俺の車蓋を照らしてくれ、今は山の奥までくっついてくる。お前の助けを借りて俺は秋の悲しみを少なくし、ぶらぶらしつつお前を見て、眠るのも遅くなる。まるで故郷に帰って、親友に会っているようだ。

松の下を行けばお前がついて来てくれ、溪畔に座ればお前が会いに来てくれる。千巖も万壑も、何処へ行ってもお前は必ずついてきてくれる。

白居易は月を擬人化しており、月に語りかけている。また月と一緒に旅をしている。

忠臣も、「夜の明きこと晝のごとくして 嘉賓^{かひん}を宴す、老免寒蟾^{かんせん} 主人^{あるじ}を助く（夜明如晝宴嘉賓、老免寒蟾助主人）」（「八月十五夜、宴月」）と詠じている。「老免寒蟾」は月の別称である。忠臣は八月十五夜の月を擬人化しており、月は忠臣を助ける友達になっている。

道真は、これらの伝統を意識しつつ、「風は驅^かりて旦^{あした}に達るならん、月は送りて自らに通霄^{おのずか}なり（風驅應達旦、月送自通霄）」（075「秋日山行二十韻」）という句を詠じている。月は夜を徹して詩人に連れ添い、見送ってくれる友達である。

道真は白居易の影響を受けて、前述の0980「山中月を問う」の景物を擬人化して問いかける形式を学び、さらに白詩の0915「春に代りて贈る」と0916「春に答う」、3157「鶴に問う」と3158「鶴に代りて答う」などから、二首一対の問答の形で自分を暗喩することを学び、太宰府では、510「秋の月に問う」と511「月に代りて答う」という詩を作って、自分が無罪^{むざい}なのに流された悲しみを詠じている。

「秋の月に問う」と「月に代りて答う」を見よう。

度春度夏只今秋 春を度り夏を度り 只今は秋
如鏡如環本是鉤 鏡の如く環の如くにして 本これ鉤^{つりばり}なり
爲問未曾告終始^{かろがゆえ} 爲に問う 曾^{しやうし}つて終始を告げざりしことを
被浮雲掩向西流 浮べる雲に掩^{おお}われて西に向いて流る
(510「問秋月」)

月が春を渡り、夏を渡り、今や秋となった。月は鏡のような時もあり、環のような時もあるが、もとのかたちは釣り針である。月に聞きたい、そなたはいつも運行していて終始一貫誤ったことがない、なのにどうして今は浮雲に覆われ西に向かって流れていくのだろうか。

第1、2句には、「鏡」「環」「鉤」など、中国・日本を通じて、典型的な月の喩詞を並べて、月の形の変化を示している。白詩には、「寒流月を帶びて澄鏡^{ちやう}の如く（寒流帶月澄如鏡）」（0913「江樓宴別」）、「落月玉環^{らくげつぎよくかんしず}沈む（落月沉玉環）」（2252「和櫛沐寄道友」）、「浦に沈みて月鉤^{ほしず}を生ず（沈浦月生鉤）」（2379「履道新居二十韻」）、「樓角玉鉤生ず（樓角玉鉤生）」（3278「八月三日夜作」）などの例が見える。

この詩では、月が被喩詞として、さまざまなものに見立てられると同時に、喩詞として詩人自身のことをも暗喩している。詩人自身の人生の歩みがまるでいまの秋の月のようだ。春のような明るく、成長する青年時代を過ぎ、夏のように森が枝も葉も緻密で、盛んな壮年時代も超え、今、ついにこの葉も枯れて落ちた、荒涼とした秋のような老いの時を迎えた。天皇から信用され、右大臣の高位にまで昇り、また文章博士として世の人の憧れの的となり、自分の人生は、かつては鏡か環に似た満月の

ように満ち足りたものだった。けれど、私が気づかなかっただけで、本来、私の運命は鉤のように寂しく悲惨なものであったのだ。

第3、4句は、自らを明月に喩え、明月を覆う雲を讒言に寓している。川口氏は、「古楊柳行に『讒邪害公正、浮雲翳白日』とある。佞者が君主の明を覆うことの喩え。文集にもしばしばみえる」¹⁷と指摘している。李白の名作「金陵の鳳凰臺に登る」にも、「總て浮雲の能く日を蔽うが爲に、長安は見えず人して愁えしむ」の名句がある。『楚辭・九辯』には、「何んぞ汨濫せるの浮雲が^{はんらん}森として此の明月を^{ようへい}壅蔽す」¹⁸の句もある。自分が月のように、終始一貫正しいことをしているのに、讒言に覆われ、太宰府に左遷されねばならなかったのかと、月に、どうして自分が無実の罪を被るのか尋ねている。

詩人は次の作で、月に代ってこう答える。

萸發桂香半且圓 萸^{めい} 發^{ひら}き桂香しくして 半圓ならんとす
 三千世界一周天 三千世界 一周するの天
 天廻玄鑑雲將霽 天玄鑑^{げんかん}を廻^{めぐ}らして 雲將^{まさ}に霽^はれんとす
 唯是西行不左遷 ただこれ西に行く 左遷にあらず
 (511「代月答」)

第1、2句、月によびかける人よ、私の世界月では、萸莢が莢を発し、桂の木が香って、まもなく半月になろうとしている。私は、三千大千世界の天をひとめぐりしているのだ。

「萸は萸莢、堯の時代に生まれたという瑞草。毎月一日から十五日までは莢が一つずつ生じ、十六日から晦日までは一つずつ落ちた……『萸発』は、萸の莢が生じること、つまりは月が十五日の満月に近づいていることを言う。」¹⁹ 三千世界は「もと仏教經典の用語で、仏教的世界観によれば小千世界、中千世界、大千世界の形に構成されている無数の世界の全体の総称……ここは、月が天に並ぶ二十八の星座、即ち二十八宿を順次まわって天を一周することを言う」²⁰。

第3、4句は、「天は深い洞察力ですべてを正しく見抜き、私を覆っている雲ははれようとしている。わたしはただ西に向かって進んでいるだけ……。おまえのように左遷されたわけではないのだ——『玄鑑』は、すべてを映し出す玄妙な鏡。ここはあらゆるものことを見通すことができる天の力を言う。」²¹の意。

¹⁷ 川口久雄校註・同8・739頁、510補注。

¹⁸ 星川清孝校註『楚辭』（明治書院・1970年）297頁。

¹⁹ 小島憲之・山本登朗校注『菅原道真』（研文出版、1998年）174頁。

²⁰ 小島憲之・山本登朗校注・同上19

²¹ 小島憲之・山本登朗校注・同上19。

小島氏は、「作者は、月の姿に自分を重ね合わせながら、天をゆく月と地上の自分の運命の根本的な違いを確認して自問自答の作をとじる。」²²と述べている。道真は、無罪なのに左遷された不幸な運命を、ただ一人で味わうしかない。

道真が月を自分のことに喩えるのには、また以下の例がある。

雲生不放寒蟾素 雲生まるれば 寒蟾の素きことを放たず
桂死何勝毒蠹緇 桂死れんとして 何ぞ毒蠹の緇きことに勝えん

(119「余近敘詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見訓。更依本韻、重答以謝」)

道真が讒言に遭った時の詩である。寒蟾は月の別称、一句は雲が生じて、月の光を覆うこと。下句、「桂」は月中に生えている、その「桂」が毒虫に蝕まれて死んでしまうとは、道真が自分のことを月に暗喩して、誹謗に堪え難い状態を述べている。

また次の例：

當時誰道四方在 當時誰か道いけん 四方に在らんと
苦惜孤輪獨望西 苦に惜しむなり 孤輪の獨り西を望むことを

(361「霜夜對月」)

道真が都に戻った時の作である。讃岐にいた時を顧みると、当時の吏務は実に忙しかった。独り西に沈みゆく月がまるであのころの自分のようだ。

次に、道真が太宰府に流された時の名作：

黃萎顔色白霜頭 黃に萎める顔色 白き霜の頭
況復千餘里外投 況んや復千餘里の外に投れるをや
昔被榮花簪組縛 昔は榮花 簪組に縛られ
今爲貶謫草萊囚 今は貶謫せられて草萊の 囚 となる
月光似鏡無明罪 月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし
風氣如刀不破愁 風の氣は刀の如くなれども 愁えを破らず
隨見隨聞皆慘慄 見るに隨い聞くに隨いて みな慘慄
此秋獨作我身秋 此の秋は獨り我が身の秋と作りたり

(485「秋夜」)

²² 小島憲之・山本登朗校注・同上19。

私はすでに老い衰え、顔の色も黄色くしなびてしまい、髪の毛も霜のように白くなった。そのうえ、都からはるか遠いところに流された。かつて栄華の時には世俗に縛られていた、今は貶謫されて田舎に囚われの身。月の光は鏡のように明るく澄んでいるが、私の無罪を明らかにしてはくれない。秋の夜の風は刀のように鋭いが私の憂えを切り棄ててはくれない。この月を見るにつけてもこの風の音を聞くにつけてもひたすらに悲しい。この世を悲しくさせるはずの秋が、いまは私だけに^{まとわ}繞り、私一人にその悲しみを全部背負わせている。

この詩の第六句は、白詩の「^{するど}凄風利きこと刀に似たり（凄風利似刀）」（2542「晩寒」）を学び、結句は、白詩の「秋來たりて只一人の爲に長し（秋來只爲一人長）」（0860「鷺子樓」²³）を学んでいるだろう。

この詩では、月が被喩詞として、鏡に喩えられると同時に、月の純粹で澄明なイメージは、おそらく無罪の詩人のことを暗喩している。

月を自身のことに見立てる例は、日本の漢詩人では道真以前に例がない。ではなぜ、道真は月を見て自分を連想するのだろうか。松浦氏は月が李白の心をとらえた主要な原因として、「一つは、月の永遠性、不変性、といった性格である……第二の性格は、その超越性、あるいは不可触性である……第三は、月光のもつ感覚的な特色、とくにその透明、清澄な感覚である」ことを指摘している²⁴。道真が、月を見て自分を連想したのは、彼が特に月を愛したことと共に、月の「透明、清澄」、及び「不変性」が、自分の性格に似ていると感じ、感情移入が容易であったことが、大きな原因だと思われる。

道真は白詩を愛読したが、白詩の詩句や表現自体だけではなく、白居易の表現理論もよく学んでいる。白居易は「元九に与うる書」で比興表現を強調している。また3661-3672「禽蟲十二章」などの寓言詩65首があり、更に「白鶴」、「白牡丹」、「白蓮」など、自身を喩える作がある。後藤昭雄氏は『菅家後集』の490「雪の夜に家なる竹を思う」に関して、「このような旧套を脱した述懐詩の詠出は、やはり太宰府謫居という、この時詩人が置かれていた境遇の中で始めて達成されたものと見るべきであろう」²⁵と論じた。道真は白詩を意識しつつ、またつらい環境に身を置いて、「菊」、「蘭」、「梅」、「松」、「竹」（475「冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂」）などで自分のことを見立てるだけでなく、月を自分の分身と見る表現を創出したのである。

道真は太宰府へ左遷される前と左遷された後、何れの時期にも見立ての技法を幅広く使っている。だが、それは同じような表現の連続ではない。

太宰府へ左遷される前、道真は当時最もすぐれた詩人として、詞藻（詩語の美しさ）、詩想（立意）など、全て同時代の詩人をはるかに超える域に達していた。「詩臣」であることを自分の生きがいと

²³ 波戸岡旭著・同上9・216頁。

²⁴ 松浦友久著『李白－詩と心象－』（社会思想社、1984）・66頁。

²⁵ 後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩について」、『香椎湯』第二十七号（福岡女子大学国文学会、1982年3月）79頁

信じていた道真にとっては、「宮廷詩人」に相応しい詩——美しい言葉、洗練された修辞を持つ詩——を作ることこそが、自らに対する基本的な要求であった。このため、太宰府に左遷される前、「詩臣」道真の詩は、見立て表現よりも、美しい「月」の風景を多く詠じることに力を入れている。

けれども、太宰府へ左遷された道真は、「詩臣」の栄華を失ってしまい、それゆえにこそ、「詩人」の本質に接近することになった。美しい洗練された表現を追求するだけではなく、表面的な詞藻よりも、自分の悲しみと痛み、自分の心の本音を率直に表現するようになったのである。大曾根章介氏は、『菅家後集』の514「謫居の春雪」について、「彼の詩の世界が狭いものであったにせよ、心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう」²⁶といわれた。太宰府への左遷という境遇の激変により、「詩臣」という自身の生きがい、アイデンティティの根幹を奪われたことによって、道真は日本漢詩史に永遠に其の名を伝える、空前絶後の詩人になったのである。

2-2 明月と天皇

道真の詩には自身のこと以外に、月を天皇に見立てる例がある。

年有一秋秋有三 年に一たび秋あり 秋に三有^{さんあり}り
 就中季白意難堪^{なかんずく すえのあき} 就中に季白ぞ 意堪え難^{こころ}き
 雨寒遠感吳江水 雨寒くして遠く感ず 吳江^{ごこう}の水
 風冷遙思楚嶺嵐 風冷たくして遙かに思う 楚嶺^{それい}の嵐
 淺分花凋蘭不恨^{せんぶん} 淺分 花は凋むとも 蘭は恨みず
 貞心露結竹猶含^{ていしん} 貞心 露を結びも 竹の猶お含めるがごとし
 穿雲明月應能照 雲を穿ちて明月 應に能く照らすべし
 何更人前事事談 何ぞ更に人の前にして 事事^{かた}を談らん
 當時依微諫、負小讒。應製之次、聊以形言。
 當時微諫に依りて、小讒を負えりき。應製のついでに、聊かに言に形せるなり。
 (436「九日後朝、同賦秋深、應製」)

この作は、寛平八年（八九六）、道真が都にいたときの作である。詩の註から見ると、道真はこの時、誹謗中傷を受けている。一年に一度の秋が訪れた、この秋にも初秋・仲秋・晩秋の三つの時がある。このうち、晩秋こそは、最も耐え難い。雨がまるではるか彼方にある吳江の水のように冷たく、風も

²⁶ 大曾根章介著『大曾根章介日本漢文学論集・第二巻』（汲古書院、1998年）48頁。

楚嶺の嵐のように冷たい。ちっぽけな私だが蘭の花びらが落ちててもそれを悲しみはしない、白霜を結んでも、竹が貞しい心を持つように私の貞節は変わらない。浮かべる雲が明月を覆っても、月の光はきっと雲を貫いて真実を照らしてくれる。人々の前に、これが讒言であることを一一説明する必要はない。

この作において、道真は自分のことを品格が高い蘭と竹に見立てている。そして、浮かべる雲が明月を覆っても、月の光が雲を貫いて真実を照らすという、この明月は天皇を暗喩しているだろう。天皇の聡明を称賛し、天皇はきっと真実を知ってくださるだろうと詠っている。これについては、波戸岡氏が已に指摘する²⁷。

道真が天子のことを月に見立てる例は、他にもある。

高齋待月月何淹 高齋に月を待てば 月何ぞ淹^{ひさ}しき
不畏風霜幾撥簾 畏れず 風霜の幾たびか簾^{はら}を撥うことを
(036「山陰亭、冬夜待月」)

詩人は書齋で月が昇るのを待っている。だが月は今雲に覆われ、寒く厳しい風が何度も書齋の簾を襲っている。この詩は貞観八年(八六六)、二十四歳の時の作である。川口氏は、「当時詩人無用論などが横行した社会風潮の厳しさが菅家廊下に及んだ」²⁸と指摘している。詩人無用の厳しい風潮が横行していても、詩人は自信満々である。「明月」は、天子が自分を認めてくださることを寓しているだろう。

また次の例：

秋珪一隻度天存 秋珪一隻 天を度^{わた}りて存す
下照千家不定門 下は千家を照らして 門を定めず
聖主何憐三五夜 聖主 何ぞ三五の夜を憐れみたまわん
欲將望月始臨軒 將に月を望まんとして 始めて軒に臨む
(441「八月十五夜、同賦秋月如珪、應製」)

円い玉のような秋の月が空を渡っていき、一切の差別なく、世の中の人を照らしている。聖主はなぜにこのようにも十五夜の月を慕って欄干に依られるのか、自分もまた明月のように全てを平等に照らしたいと望まれるからだろう。

²⁷ 波戸岡旭著・同上9・213頁

²⁸ 川口久雄校註・同上8・132頁、36注2。

この詩は、道真が寛平九年（八九七）、右大臣に任じられた最盛期、八月十五日の侍宴詩である。道真は、明月が、一切の差別なく世の中の人を照らすように、貴賤の区別なく国民を愛する聖主を頌え、月に天皇を寓している。

ところで、中国の伝統では、天地万物の全てに「陰陽」がある。太陽は「陽」、月は「陰」、昼は「陽」、夜は「陰」、男は「陽」、女は「陰」、天子は「陽」、臣子は「陰」である。従って、中国では、天子は、「日」「太陽」に喩えられるのであって、「月」に喩えられることはない。

では、道真はどうして月に天皇を寓するのだろうか。

月を人に寓する例は、中国・日本、どちらにおいても例は少なくない。孤独の「月」によって、「戌邊」の旅人や、「閨怨」の婦人などを象徴し、「月」を恋人あるいは美人の容貌に暗喩するなどの句は枚挙に暇がない。挙例は省略する。

『懷風藻』では、「皇明^{こうめい} 日月^てと光り、帝徳 天地^みに載つ（皇明光日月、帝徳戴天地）」（大友皇子「侍宴」）が、「日」と「月」とを併用し、天皇のことを賛美する。『文華秀麗集』所収、菅原清公の「侍中翁主挽歌の詞に和し奉る」其二是、「漢浦星光^{かんぽ}缺け、秦樓月影^{しんろう}空し（漢浦星光缺、秦樓月影空）」と詠じ、皇女が亡くなるのを、まるで星の光が欠け、月の光も空しくなるようだとして表現している。島田忠臣は、「高侍郎を夢む」に、「筆海君に馮りて 此の日に爲らるるも、長悲して 片月早に泉に歸りぬ（筆海馮君爲此日、長悲片月早歸泉）」と詠じ、亡くなった親友の高階令範²⁹のことを月に見立てている。

和歌にも、『万葉集』にすでに、月を身分、才能などが高い人に見立てる例がある。例えば、柿本人麿が「日並皇子尊の殯宮の時につくる歌一首と短歌、その短歌の「反歌二首」の其二（169）は、「（あかねさす）日は照らしているが、（ぬばたまの）夜空を渡る月が 隠れるのが惜しい（あかねさす日は照らせれど ぬばたまの夜渡る月の 隠らく惜しも）」³⁰と詠じている。これは、月が隠れるのを皇太子が薨ずることに喩えている。

『古今和歌集』の巻十七、部立「雑歌上」に載る業平朝臣および尼敬信の句も、月を身分が高い人に喩えている。業平朝臣は、「惟喬親王が狩をなさった時のおともに行き、旅宿に帰って夜もすがら酒を飲み、世間話をしているうちに、十一日の月もはいりそうになった。その時、親王は酒に酔って奥の方にいってしまおうとなさったので、すかさずよんだ歌」³¹に、884「まだ見飽きてはいないのに もうお月様が隠れるのですねえ。西の方の山の頂が身を引いて月をいれないでもらいたいものです（飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端^はにげて入れずもあらなむ）」と詠じている。これは、惟喬親王のことを月に喩えている。また、尼敬信は、「文徳天皇の御代に、賀茂の斎院であらせられた慧子内親王をその母君に過失があるといって交代させようとしたが、その話が沙汰やみになったので詠んだ

²⁹ 中村璋八・島田伸一郎校註・同上5・152頁。

³⁰ 小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集①』（小学館、1994年）120頁。

³¹ 小沢正夫校注・訳『古今和歌集』（小学館、1971年）336頁、次の例も同じ。

歌」に、885「大空に輝い上がっていく月のように清らかなあなたですもの、雲が隠そうとしたけれど、光は消えませんでしたよ（おほぞらを照り行月し清ければ雲かくせどもひかり消なくに）」と詠じている。これは、無罪と証明された斎院とその母のことを月に比喻している。

和歌では、天皇を日に喩える例も、やはり少なくない。日に喩えるのは、例えば、『万葉集』には、「(やすみしし) わが大君の (高照らす) 日の神の御子天皇が (荒たへの) 藤原の地で……(やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 [傍点は筆者、以下同様] 荒たへの藤原が上に……)」(0050「藤原宮の役民が作る歌」)とあり、また「(やすみしし) わが大君の (高照らす) 日の神の皇子の天皇が お治めになる 御食つ国の (神風の) 伊勢の国は……(やすみしし 我ご大君 高照らす 日の皇子の 聞こし食す 御食つ国 神風の 伊勢の国は……)」(3234「雑歌二十七首」)とあるように、同じような表現がいくつか見える。

ただし、「日の皇子—『やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子』のような尊称は、天武・持統・文武の三天皇および天武の皇子の一部に限って用いられる」³²との説があり、これに拠れば、その用法は限定され、かつ天皇だけではなく、身分の高い皇子に喩えることもある。

いずれにしても、「日の皇子」が、天皇もしくは皇子に喩えられる例は、『万葉集』中、枚挙に暇がない。

「日月」を天皇のことに寓する例は、日本漢詩においては、前述の「侍宴」大友皇子の句以外に、「天子哀傷して神筆を下す、悠悠たる功德 日月と懸る」(小野岑守「奉和傷右衛大將軍故宿禰御製」)の句も見える。

和歌では、『万葉集』、0933「山部宿禰赤人が作った歌一首(と短歌)」の長歌で、「天と地が 無窮であるように 日と月が 長久であるように (おしてる) 難波の宮に わご大君 遠長く国を治めになるのも無理はない(天地の 遠きがごとく 日月の 長きがごとく おしてる 難波の宮に わご大君 国知らすらし)」と、天皇が日月のように長く国をお治めになることを頌えている。また、4486「天平宝字元年十一月十八日に、内裏で宴を催された時の歌二首」の大伴宿禰家持が作った歌は、「天地を 照らす日月のように 限りなく あるべき皇位なのに 何かを不足に思うことがあろうか(天地を 照らす日月の 極みなく あるべきものを 何をか思はむ)」と、天皇のことを日月に寓している。

中国では、天子の聖徳を「日月」の光に喩える例がよくみえる。例えば、「赫赫たり大聖朝、日光り照臨す」(顧況「雜曲歌辭」)、「睿明は日月と懸かり、千歳此の時に逢う」(王昌齡「駕幸河東」)など、その用例は多い。

以上のように、天子・天皇を、日、日月に喩える例は、少なからず見える。しかし、天子・天皇をただ「月」に喩える例は、中国・日本を通じて見えない。月を天子に寓したのは、道真の独創なので

³² 小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『万葉集③』(小学館、1995年) 394頁。

ある。

道真は、菅原清公の「侍中翁主挽歌の詞に和し奉る」、柿本人麿の「反歌二首」の其二について見たように、月を身分の高い皇子や皇女に喩える例を意識している。また、真っ暗な夜空で、一番眩しいのは確かに月であり、特に、十五日夜のまんまるの月には、美しく光り輝く強い印象を持っている。加えて、道真は、少年時代から月を愛し、道真の意識の中で、月はとりわけ身近で、また高い地位を占めていた。それゆえに、道真は、日本の漢詩史の上だけでなく、中国の詩においても稀少な、彼独特の比喩表現を多数作りだしたのである。

結びに代えて

拙文では、道真詩における「月」の見立て表現がどのように白詩を初めとする中国文学の影響を受けて、新たな表現技法を作り出したのかを考察した。

道真は中国文学の伝統を深く意識しつつ、月を詠じており、月を自分の人生への思いと深く関係するものとして詠じている。さらに月を自分のこと、天皇のことに喩え、修辭の美しさを突き抜けて、太宰府では自分の真情を痛切に流露することとなった。道真の詩は、まさしく、藤原克己氏がいわれるように「空前絶後の光芒を放つもの」³³となったのである。

³³ 藤原克己著・同上1・268頁